



TITLE:

松岡孝児博士の長逝を悼む

AUTHOR(S):

中谷, 実

CITATION:

中谷, 実. 松岡孝児博士の長逝を悼む. 経済論叢 1957, 79(3): 271-272

ISSUE DATE:

1957-03

URL:

<https://doi.org/10.14989/132523>

RIGHT:

經濟論叢

第七十九卷 第三號

故 谷口吉彦博士、故 松岡孝兒博士遺影ならびに署名

觀光税の問題点……………	神 戸 正 雄	1
米国外投資の成熟と停滞……………	岡 田 賢 一	14
財政学と国家認識……………	斎 藤 博	37
故 谷口吉彦博士略歴・主要著書論文目録……………		55
追憶文（石川興二・松井 潜・河野健二）		
故 松岡孝兒博士略歴・主要著書論文目録……………		69
追憶文（中川与之助・中谷 実・酒井一夫）		

昭和三十三年三月

京都大學經濟學會

松岡孝児博士の長逝を悼む

中 谷 実

昭和三十一年十二月十四日、元京都帝国大学教授松岡孝児博士は忽焉として逝去せられた。かねて、健康が勝れさせられな

博士から御教示をうける最後のものとなった。おもえば感慨無量である。

終戦後、博士は京都大学を去られ、商社の調査部長を引受けられた。おもうに、その学風が、周到綿密な調査研究を基礎として論を立てるという点で優れていたから、商社の懇請をうけられたのであらう。しかも、実業界の多忙な仕事にたずさわりながら、金融学会等の席には、必ず顔を出されたものであった。ある部会の開かれたおり、たまたま事務の手落ちで、博士に案内が届かなかったとき、私は博士の御叱りを蒙ったことを覚えてゐる。学問好きの博士が、一寸でも学界から離れたくないとの御氣持からだとおもわれる。昨秋の京大経済学会大会には、病室を抜けて出てこられたとのことであるが、それは、病室での退屈さを紛わすためではなく、真に学問に惹かれての御出席だったにちがいない。博士はまた、北海道大学教授として、屢々京都から札幌まで講義に出かけられていたが、去年の夏には、病を推して無理に長期の講義をせられたと聞いている。その学問への熱意と責任観の強さには、まったく頭が下るのである。

博士の享年六十三。漸やく制度上の停年に達せられたとはいふものの、その学問研究への闘志は愈々旺んであった。天もし博士に齡をかすならば、すでに準備をせられていたとき、畢生の大業をも完成せられたであらうし、学界への貢献はいうまでもなく、後進の裨益するところがどれほど大きかったであらう。

故松岡博士追憶文

う。しかも無情の風は、京大附属病院の一室で、果なくもその生命の火を吹き消して了った。哀惜極まるころがない。ここに博士の在りし日を偲び、御冥福を祈る次第である。